

海老名弾正の平和論

輪島 達郎

<要旨>

日露戦後期から第一次大戦期にかけての海老名の平和論を海老名の「神の国」論に即して検討する。まず日露戦後期において、海老名は平和の実現を地上における「神の国」の実現として理解し、その実現手段としての戦争を積極的に正当化し、非戦主義を批判していた。つぎに第一次大戦期においては、「神の国」における国民の自主独立性に逆行する官僚主義と軍国主義を批判しつつ、それらを打破するための戦争についてはこれを肯定していた。さらに、大戦末期においては、大戦後における万国聯立主義と民主主義による平和の到来を展望していたが、それを具体的に裏付ける根拠はかならずしも十分に提示されていなかった。

キーワード：海老名弾正、戦争、平和、神学、政治思想、日露戦争、第一次世界大戦

Keywords: Danjoh Ebina, war and peace, Christian theology, political thought, the Japanese-Russo War, the First World War

はじめに

海老名弾正（1856-1937）は、植村正久や内村鑑三とならんで、明治から昭和初期にかけての代表的なキリスト教指導者である。本郷教会での雄弁かつ先鋭的な説教を通じて、あるいは自ら主宰した雑誌『新人』における旺盛な執筆活動によって、あるいはまた同志社の総長として、その影響力は同時代知識層の広範囲に及んだ。

海老名を他のキリスト教指導者たちから際立たせているのは、彼が日本古来の信仰や霊性を研究し、これを基盤としてキリスト教の土着化を模索していた点であり、これが彼の活動全体にナショナリスティックな色彩を与えることになった。「教育と宗教の衝突」論争をはじめとするキリスト教界への攻撃にたいしては、キリスト教は愛国主義と矛盾しないという立場からキリスト教の擁護を続け、日清、日露、第一次大戦のいずれにおいても義戦論を展開し、さらには日本の対外膨張主義をも一貫して肯定していた。また1930年代以降のいわゆる「日本的キリスト教」の形成、およびキリスト教界の戦時体制への協力において、海老名が果たした理論的あるいは精神的役割は大きかったとされる¹⁾。

しかし他方で海老名は、国粋主義と軍国主義を批判して博愛主義を訴え、日本の伝統的な祖先崇拜をしりぞけ、個人の価値と民主主義を擁護した側面をあわせもっている。それらは例外的あるいは状況的なものではなく、海老名の多くの著作に繰り返し論じられていることからすれば、むしろ海老名の思想と神学の根幹をなしているといえる。海老名のこ

のような反（あるいは「脱」）ナショナリズム的側面は、「日本的キリスト教」に連なるナショナリズムとどのように接合しているのだろうか。

本稿は、このような問いを念頭におきつつ、日露戦争後から第一次大戦期にかけての海老名弾正の平和論を、彼の神学、とりわけ「神の国」論との関係において検討することを課題とする。海老名の平和論を検討の対象とするのはふたつの理由からである。ひとつは、平和論において、世界秩序をめぐる神学的小よび政治学的立場——平和とはどのような状態であり、どのように達成されうるか——が明らかにされると考えるからである。いまひとつは、本格的な近代戦争が開始された日露戦争および第一次大戦当時の歴史状況において、海老名がどのような事実を根拠に平和を展望していたか（あるいは展望できなかったか）を検討することで、海老名の時代認識とそこから導かれる課題認識が明らかになると考えるからである。

また、ここで日露戦争後と第一次大戦期の海老名の著述を取り上げるのは、この時期に海老名の平和論がまとまった形で論述されたことに加えて、日露戦争後には原理的小しくは神学的平和論——「神の国」の完成としての平和——が、第一次大戦期には歴史的小しくは政治学的平和論——「万国聯立」と民主主義による平和——がそれぞれ展開されているからにほかならない。日露戦争後の平和論は、第一次大戦期の世界情勢の中で具体化し、深化したのであるが、原理的小的な側面についてはむしろ日露戦争後の著述のほうが明瞭である。したがって本稿ではまず、日露戦争後の海老名の平和論を考察し、つぎに第一次大戦期の平和論を考察することになる²⁾。

1 「神の国」と博愛主義

日露戦争後の海老名の平和論は、幸徳秋水、堺利彦、内村鑑三らの非戦主義にたいする批判という文脈の中で展開された。その主張を要約すれば、非戦主義の主張は空想的なものにすぎず、国民の霊的な覚醒に導かれた闘争を経て、博愛主義が勝利を収める「神の国」を地上に建設することによってしか、真の平和は実現しないというものであった。本節においては、海老名にとって「神の国」がどのような内実を備えたものであったか、という点を見ておきたい。

海老名は、彼の神学をはじめて本格的に体系化した著作である『基督教本義』（1903年・明治36年）において、山上の説教に言及しながら、「神の国」について次のように述べている。

「彼れ（筆者註：耶蘇）の天国は心貧しき者の入るを得べく、柔和なる者の受け嗣ぐべく、飢え渴く如く義を慕う者の満足すべく、心清き者の神に見ゆるを得べく、平和を求むる者の神子の尊榮を蒙るべき社会であるを見れば、如何ばかり倫理的なるかは推して知るべきであろう。彼れの国は無窮なる倫理的真理の地上に実現せらるべき国

である。故に其政治は取も直さず無窮なる神の道義法の政治に外ならない。この国に於ては一人の奴隷なく、悉皆自主自由の民ばかりである、無窮の神は此国の父で、人民は皆其子であれば、実に神の自由国である。人民は神の子であれば、相互に兄弟で、真の平等社会である。彼等の法律は天父の聖旨であって、この聖旨は彼等が盲従する所のものでなく、即ち彼等が心の肉碑に銘せられたる各自の法律、否各自の自由意志であれば、彼等は実に皆神の子たるの境涯に生活するの光栄を有する。此の社会が即ち耶蘇の所謂神の国又は天国というのである。」(『基督教本義』 pp.87-88)

ここに示されている「神の国」理解の第一の特徴は、「神の国」の民がすべて「神子」とあるという点に由来する。海老名の神学が「神子の意識の宗教」³⁾であると言われるように、神の国における神と民との関係は、まず何よりも、父子の一体的関係として理解されていた。この父子関係は、イエスと父との関係に由来する。「人爵の神子一変して天爵の神子となり、神の国は即ち基督の国なり」というに至れり。基督此神子の意識を其門弟に与えたるより、神国は即ち神子等の国となれり」(『新国民の修養』1910年・明治43年、pp.34-35)という記述からも理解できるように、海老名特有の養子論的なキリスト理解によって、イエスと父との関係がそのまま人間と父との関係に拡大していく。神と人間との関係が神とイエスとの関係から導き出されることによって、人間は神に「盲従」する存在ではなく、「自由意志」によって自発的に聖旨を実践する自由な主体として理解される。日露戦争後の『新国民の修養』では、このことを次のように表現している。

「神の国とは独一無上の神の統治し給う国たるは疑うべからずと雖も、其人民は悉皆神を恐怖する奴隷の民たるべきか。曰く断じて然らざるなり。神の国は神子の国なり、神奴の国にはあらざるなり。」(同 p.34)

したがって、「神の国」は、一方で人間の意志がそのまま神の意志と一致する倫理的世界であると同時に、人間が一切の支配的關係から解放され、完全な自由を享受する世界であるということになる。

海老名の「神の国」論の第二の特徴は、「神の国」が「地上に実現」すべきものと理解されている点である。それは「神の国」の霊的な理解、すなわちアウグスティヌスによって代表されるプラトン主義的な「神の国」理解とは異なり、リッチェルに代表される自由主義神学の流れをくんだ、歴史内的で社会的な実在としての「神の国」を意味する⁴⁾。それは人間によって、神の意志を実現することを通して建設されるのであるが、「神の国」の建設に人間が従事するのは、イエスによって「霊的覚醒」が起こってイエスとともに神の子となり、神の意志の実現をみずからの意志とするにいたるがゆえである。したがって、海老名の「神の国」の地上性は、養子論的なイエス理解、およびイエスを通じて覚醒した「神の子」としての人間理解と密接な関係をもっている。

以上のような海老名の「神の国」理解をふまえた上で、本稿の課題との関係でつぎのような問題を論じておかなければならないであろう。第一に、「神の国」の実現の主体に要請される「靈的覚醒」が、どのような政治社会思想的な意味を内包しているかという問題である。第二に、「神の国」建設の手段と過程はどのようなものであり、歴史は現在どのような過程にあると理解されているか、すなわち歴史哲学の問題である。

まず第一の問題、すなわち海老名における「靈的覚醒」の政治社会思想的意味の問題から検討しよう。海老名は『新国民の修養』において、カント的な主観哲学によって自然神学を構築していく自由主義神学の典型ともいえる自我論を展開している。

「我れの我れたるは、我れの我れたるが為め也。われにして我れたらざれば、如何んぞわれの存在あらんや。われの存在はわれの活動にあり、われのわれたる活動にあり。人何ぞ、われに帰らざる。」(『新国民の修養』 p.173)

「人は無限の理想を追求する自己本然の衷心に示されたる、其時其処に於ける、神の声に従うの外はあらず。此の声や世論も、師友も、賢哲も、伝説も、規則も、習慣も、父母も、愛人も、抗すべからずして屈すべきの声也。」(同 p.174)

「一個独立の『われ』なき処、焉んぞ道あらんや、焉んぞ神あらんや」(同 p.175)

このような海老名の自我論の最大の特徴は、個人の独立性をまず大前提とし、それを靈的覚醒の条件としている点である。他方、すでに述べたように、靈的覚醒は「奴隸の民」を脱した「自主自由の民」を形成する。したがって、靈的覚醒は、認識論的な意味で独立した存在としての個人を、社会的にも独立した価値を有する存在として承認するという事態を含む。この意味で、海老名の靈的覚醒の概念はきわめて社会的なものであるといえる。それゆえこの概念は「国民の覚醒」という概念にも容易に転用されることになる。いずれにしても、海老名が「個人」という概念を神学的にも政治社会思想的にもきわめて重視していたことは疑いえない。

他方、海老名の「個人」概念は、このような出自からも想像できるように、倫理的な要素をはじめから含んでいる。すなわち、個人の尊重は利己主義に帰結するものではなく、むしろ身分や国籍に拘束されない個人としての人格尊重、すなわち博愛主義にいたると言うのである。海老名は、アメリカ国民の独立性を評して次のように述べている。

「彼等は政治上の人民としては自主独立の帝王なり。其法律は其自主たり帝王たるの権能を保護し又伸張するに外ならず。しかも彼等は単に一個の自主たる政治的国民のみにあらざるなり。彼等は自ら労働して衣食し、世襲財産の如きによて生活するを肯んせざるなり。……しかも彼等亦単に一個の自主たる経済的国民にはあらざるなり。其済々たる健児は亦道德界の帝王たらんことを期す。其勇壮快活なる青年は力を極めて矯風の事業に従事し、国家社会の元気を振起し、以て其意志の健全にして強大なる

を証明しつつあるなり。」(同 p.32)

このようなアメリカ国民と対比するとき、日本国民は個人の独立性を獲得していないと海老名は言う。

「従来の精神的世論は日本民族をして君主の奴隷たらしめんとするの傾向ありき。是れ俗忠君なり。其俗的忠君の甚だしき、或るは帝国が独り君主御一人の皇国にして、各自の国家たるを忘れしむるに至るやも知るべからず。試に思え、四千万の日本民族が道義界の帝王たり、天子たるの意識を発揮するの暁を。邦家の光荣何ぞ之れに過ぐるものあらんや。」(同 pp.35-36)

さらには、個人の独立が不十分な日本人は、「日本政權に及ぶ所に於ては、その取締を受けて、軌道を脱せずして生活することが出来ると雖も、自由の天地に居って、日本政權の範囲外に生活するときは、自から我侭となり、自から制するところを知らずして放肆になるのである」(『世界と共に覚めよ』 p.333) と述べている。このように、海老名の求める「靈的覚醒」は、博愛主義の基礎となる個人の独立の主張を含みながら、日本国民の国民としての覚醒を要請するものであった。

海老名の個人主義は、ここにおいて「世界的博愛」へと飛躍する。海老名の個人概念が内包する倫理的要請は、国民の覚醒という場面においては、日本国民に「狭隘なる日本主義」と「島國的根性」を脱却させ、「宇宙的性格」と「世界的博愛」をもたらす。海老名にとって、ユダヤ教からキリスト教への転換は民族的宗教から世界的宗教への転換であり、同様にキリスト教による国民の靈的覚醒は、国民の世界的博愛への覚醒を意味する。

他方で、海老名のこのような「個人→国民→世界」という同心円的な構造をもつ倫理は、20世紀初頭における帝国主義的對外膨張を正当化する論理にたやすく接合していくことになる。海老名は、韓国人にたいして日本の祖先崇拜や日本にたいする愛国心を強要することを批判する一方、それによつては「彼等は竟に日本人に同化しない」(同 p.218) と述べ、さらには「神を愛する道義的精神に根ざせる大日本經營に対する愛国心」によつてこそ「日鮮一体の大理想を實現」(『選民之宗教』 p.130) することができると説く。ここには、韓国民を独立の国民として尊重するはずの「世界的博愛」の名において、植民地支配が正当化される論理が見て取れる。

さらに、日英同盟、日露協約、日米親善はすべて「地上に国家の大家族を造る」ものとして「世界的博愛」の具体的實現であるが、日本は「東洋諸国を代表して欧米列国の大家族に加入」していると海老名は考える(『新国民の修養』、p.305)。さらに、「国情によりては小国は大国と合同するを可とす、しかして大国と大国とは相提携してその進運を開き、永遠の存在を期するが如き、即ち地上に神国の顯現し来る所以にあらずとせんや」と述べて、大国による小国の併合を是認していた(同)。この議論が、日本による韓国の併合を

念頭においていることは言うまでもなかろう。このようにして「世界大家族」としての「神の国」の理想は、「列国大家族」としての実質を与えられていたのであり、この時期の海老名が「博愛主義」による「国家の発展」を期待していたのは、あくまで強国もしくは大国にたいしてだったのである。（この点は、大正デモクラシーと第一次大戦後の世界情勢の中で、「万国聯立主義」に変容していく。）

2 「神の国」実現のための闘争

次に、海老名の「神の国」論にかかわる第二の問題、すなわち「神の国」建設の手段と過程についての問題に移ろう。「神の国」建設の第一の要件は、すでに述べたように個人と国民の霊的覚醒であるが、それが歴史のどのような具体的な展開の中で実現されると考えられていたか。もちろん、この問いに答えるためには、海老名の歴史解釈と時代認識の広範かつ詳細な検討が必要であろう。しかし少なくとも、海老名が本格的に著述活動を開始してからふたつの戦争、すなわち日露戦争と第一次大戦についての論述は、このふたつの戦争が「神の国」の実現のために神によって遂行されたものであるという認識を明確に示している。

まず、日露戦争についての海老名の所見を見てみよう。すでに述べたように、海老名は日露戦争にたいしては非戦主義批判の論陣を張っていたのであるが、注目すべきは、それが海老名の「神の国」論に根ざしている点である。海老名は、「ツアール教并にカイゼル主義の打破と神の国の顕現」と題する論文において、「旧教の代表者」ロシアと「新教の通訳者」ドイツが、本来のキリスト教の博愛主義に反する黄色人種差別を主導していると批判して、次のように述べている。

「ツアール教とカイゼル主義との横行する間は、基督の天国は断じて来らざるべし。苟も其来臨を翹望するものは、超人的霊能を発揚して、先ずツアール教とカイゼル主義とを撲滅せざる可らず。……カイゼル主義とツアール主義との病根は、則ち信条主義と儀式教とに存す。之を破壊せざれば、彼は撲滅せられざるべし。儀式教と信条主義とを破壊する、唯基督の人格と其博愛犠牲の霊とあるのみ。クリスチャンたるもの、基督の霊其れ自身に帰らざらんか、今より後更に二千年の長年月を経過するあらんも、終に剣を変じて犁となし、矛を打て鎌となすの時代は来らざるべし、其翹望する神の国は、終に夢想として長く実現し来らざらん。」（『新国民の修養』p.79）

海老名は「儀式教と信条主義」の「撲滅」が「神の国」の実現に不可欠の条件として位置づけると同時に、「撲滅」の手段としての戦争を正当化していく。「戦争の帰趨と差別観の打破」という論考においては、この点が次のように論じられる。

「吾人が日露戦争に無限の興味をそそぎ、無限の感慨を以て其勝敗に注目し、日本民族をして凱旋せしめざるべからずと熱中する所以のものは、蓋し此戦争は人類平等主義の大決戦たるを以てなり。」(同 p.68)

「今や東洋の天地否世界の人類平等主義は壮絶惨絶の日露大戦を激発して、人類の平等世界の人道を謳歌せんとしつつあり、然かして日本民族は此大悲劇の大立者にして、又自から平等主義と人道主義の擁護者となれり。日本民族の指導者を以て担任するクリスチャンは強健なる大丈夫の氣象を鼓吹すべし、彼の荏弱なる、悲哀なる病的人情主義を博愛と同一視することなく、非戦主義に惑わされざるよう戒心すべし。宜しく迅雷風烈を叱咤する神の壮烈なる靈に満され、日本民族を鼓吹し、其壮烈惨烈なる大悲劇を演ぜしめ、然かして之と偕に世界人類と偕に、米仏英独の義人烈士の靈と偕に人類の平等と人道の発展とを謳歌するを期すべきなり。」(同 pp.69-70)

これらの引用には、日露戦争をめぐる海老名の歴史時代認識が示されている。すなわち、海老名にとって日露戦争は、第一に、白人中心主義およびヨーロッパ中心主義がもたらした黄色人種差別にたいして、人類平等と人道主義の勝利をもたらす義戦である。世界史は、自国中心および自民族中心主義から、普遍的な「世界的博愛」と「人類同胞主義」および「自由平等主義」へと飛躍しつつあるのであり、日露戦争はこのような飛躍を実現せしめるものであると考えられたのである。第二に、日露戦争は、「神の国」の建設のために、人間が神の靈に鼓舞されて、神の意志を実現する手段として戦われたものであるとされている。ここでの海老名の立論は神学的義戦論であると同時に、義戦論にもとづく弁神論でもある。多大な犠牲をもたらし、平和な「神の国」にはほど遠いように見える戦争の目的が神の目的に合致していることが証明されれば、その主宰者たる神の正しさが立証されるからである⁵⁾。

つぎに、第一次大戦の歴史認識と「神の国」論との関係を見てみよう。第一次大戦が勃発した翌年の1915年、2度目の渡米を果たした海老名は、一方で大戦後の世界秩序を模索する国際政治の動向に触発され、他方で大正デモクラシーの影響を受けながら、いっそう活発に国家・国民論を展開し、「万国聯立主義」と「民主主義」を強調するようになる。したがって海老名の第一次大戦観には、このようなあたらしい歴史的展望が具体的内容として盛り込まれていくことになるのであるが、議論の基本的な枠組みは日露戦争についての議論と同じである。すなわち、第一次大戦は、「神の国」を地上に実現するために、官僚主義と軍国主義にあえぐ同盟国を打破し、民主主義と万国主義を旗印に、連合国の覚醒した国民が決起した戦いであると言うのである。第一次大戦期の代表作のひとつである『選民之宗教』(1916年・大正5年)では、この点を次のように述べている。

「聯合国民は軍国主義の如き武力を以て他を圧倒せんとする政策は、畢竟之れ獸的未開的の現象として之れを現代世界より掃蕩し去らんために奮闘しつつあるのである。

吾人も彼等の提唱する如く軍国主義は未開的遺風の継承せられしものであって、文明の今日断じて是認すべきものでないと云う事を、世界の国々が覚る時が早晚来るであろうと信ずる。……聯合諸国が茲に覚醒し、人類進歩のため、世界平和の爲めに、軍国政策の根本的打破の犠牲戦をなしつつあるは、真に尊き事と云うべく、此間に精錬せらるる彼等の国民性や実に光輝燦爛たるものであらうと思う。」(『選民之宗教』 pp. 72-73)⁶⁾

このようにして海老名は、第一次大戦についても（そしてそれにたいする日本の参戦についても）義戦論を主張するのであるが、海老名の第一次大戦の歴史認識には、いまひとつの精神的な側面がある。海老名が繰り返し表明していることは、ヨーロッパとアメリカにおいて、海老名が「第二の宗教改革」と呼ぶ霊的覚醒が起こり、世界的博愛精神の理想が勃興し、これに基づいた新しい世界秩序が生成しつつある、という歴史的展望である。海老名は、イギリスでは社会政策が開始され、ドイツでは信仰の自由が実現し、「基督教による社会党の聖化」によってロシア革命やドイツ革命が起こっている、といった例を挙げながら、「善良なる意志」、すなわち「天父の聖旨に従い、その事業の完成を旨とする意志」(『世界と共に覚めよ』 p.12) が大戦を契機に勃興していると論じている。

「吾人の見を以てすれば欧州の天地は日は一日、『神国の市民』たるの自覚が各国民の間に確実にせられつつあると信じて疑わない。故に今回の戦乱を転機として欧州の天地は、其法律の上に、其制度の上に、其教育の上に、其宗教の上に、其国際関係の上に、一大進歩を来すことを信じて疑わない。更に根本的に云えば人間本来の性質の上に、一大覚醒をなし、神国の理想を地上に実現せんとするものが、東西南北に起り彼等諸民族は翕然として之に応ずるであらうと思う。之れ即ち予が常に唱うる万国主義、人道主義的、世界経営である。」(『選民之宗教』 pp.141-142)

大戦が国民精神を聖化して霊的覚醒をもたらし、その結果「神の国」の建設が急加速するという精神的な認識が義戦論かどうかといえば、大戦の結果を肯定しているだけであるから、かならずしも義戦論とはいえないであろう。しかし、少なくとも、大戦がなんらかの意味において誤りであったという結論を、海老名の議論から導くことは困難である。むしろ、海老名の非戦論批判に見られるように、海老名が「悪戦苦闘」を「万国平和」すなわち「神の国」の実現のための手段として不可欠のものと考えていた事実⁷⁾からすると、海老名の神学的もしくは哲学的な枠組そのものに、大戦のみならず、戦争全般を肯定する要素が存在していると考えなければならない⁸⁾。

しかしながら、第一次大戦段階における海老名の平和論は、「万国聯立主義」と「民主主義」の概念を得ることによって、日露戦後段階から大きく飛躍し、戦争によらずして平和を実現し、もしくは「神の国」を建設しようとの認識に達することになる。つぎにこの

点を検討しておこう。

3 万国聯立と民主主義

第一次大戦期における海老名の著述活動は、ヨーロッパ世界の急激な変動を2度目の渡米によって目の当たりにしたこともあって、新しい歴史的展望と霊的な高揚感に満ちたものとなっていた。前節で見たように、「神の国」の実現手段として大戦を把握するという点においては日露戦争における非戦論批判と共通の議論を展開していた海老名であったが、平和についての議論は、凄惨な大戦の経験をふまえたものであるにもかかわらず、日露戦後段階に比して明らかに楽観的な色彩を帯びている。本節ではこの時期の海老名が展開した「万国聯立主義」（もしくは「万国共立主義」、あるいはたんに「万国主義」）および「民主主義」についての議論を検討することによって、海老名の平和論の新しい局面を明確にしてみよう。

第一次大戦末期の1917年（大正6年）に刊行され、大戦後の世界の展望のなかでキリスト教と日本の役割を説く『世界と共に覚めよ』に収められている「万国主義の発揚」において、海老名は「万国主義」についてつぎのように述べている。

「欧州の交戦国は此大戦乱に於て多くのことを学びつつあるが、その最も大なるものは、各自国家を偉大にする所以は其特色を高調するにあらずしてその共通の徳性を発揮するにあること、又その兵力を盛にするにあらずして、その霊能を発揮するにあることを自覚することである。」（『世界と共に覚めよ』 p.18）

「霊能」とはこのばあい、「自由」と同義であり（同 p.19）、すべての国と国民に保証されるべきものである。また、弱肉強食の原理によってではなく、公義正道にのっとった国際道徳が遵守されることによって、弱小国の主権が尊重される。海老名は「万国聯立主義」について明確な定義を与えているわけではないが、これらの論述からうかがわれることは、大国小国の区別なく、すべての国家がその主権を尊重され、自由、平等、正義といった世界共通の目的を追求することである（同 p.21）。

海老名は同じ『世界と共に目覚めよ』の「世界平和の根本義」において、二種類の平和を区別している。ひとつは、「征服による平和」⁹⁾であり、それは「一大勢力が諸国を征服するより起り来る所の平和」であって、「ここには人権もなければ国権もない、一民族の権能と一主君の権能とが認められ」、「他は奴隷の状態に安んずる平和」である。江戸時代の日本や、古代ローマがこれに該当するが、「現代人は到底之れを享樂することは出来ない」と言う。（同 pp.91-92）これにたいして、「万国聯立の平和」は、「歴史上未だ嘗て見ざる」「空前の」平和であって、ベルギー、セルビア、モンテネグロなどの小国の独立が保証され、アルザス、ロレーヌはフランスに返還され、シュレスヴィヒ・ホルスタインは

デンマークに返還され、ポーランドは再興される（同 p.92）。このような平和は、「一国と列国の関係が深い根柢を有することが分かって来た」こと、すなわち「全体の幸福はその部分の幸福であり、また部分の不幸は全体の不幸であることが明瞭になってきた」ことによる「万国共立的精神」の発達に基礎を置いている（同 pp.95-96）。

このような「万国聯立主義」は、第1節で述べた日露戦後期における大国による小国の併合の容認論にどのような変更を加えているであろうか。日露戦後段階では、日本をアジアの代表者とした「列国の家族」が想定され、日本による韓国併合が正当化されていた。もちろん、「万国聯立主義」の原理からすれば、日本の韓国併合と植民地支配は正当化されえないであろう。しかし海老名の「万国聯立主義」は、各国の差異や特殊性よりも、共通性を原理とするものであるがゆえに、また、各国の主権を前提とするものであるがゆえに、いったん併合してしまった韓国の独立や主権尊重の論理はそこから導きえない。したがって海老名は、第一次大戦期においても「日鮮一体の大理想」を何の躊躇もなく掲げ、さらに「日支の融合」にも言及することになる。「万国聯立主義」がヨーロッパ的な意味での主権国家を前提とした概念であるため、海老名は第一次大戦期の中国を「聯立」すべき「万国」の中に数えていなかったのである。

つぎに、民主主義と平和の関係がどのように理解されていたかを見ておこう。すでに見たように海老名によれば、第一次大戦は「官僚主義と民主主義の衝突」（同 p.103）であった。海老名が民主主義という用語によって意味しているところは、他の多くの用語と同様かならずしも明確ではない。ヨーロッパ各国には、英仏にかぎらず、ドイツにおいても民主主義は存在するとし（同 p.104）、明治維新も「民本主義の勃興」（同 p.131）であると言われている。しかし、官僚主義と対比される文脈から推察するならば、国家の強制によらずに国民の自発的な意志と協力によって国家運営を行う体制が想定されていると考えられる。このような民主主義理解は、第1節で考察した「自主自由の民」としての「神の子」によって形成される「神の国」理解に類比できよう。（これにたいして官僚主義は、神と神に盲従する「神奴」との関係に類比できる。）したがって、海老名にとって民主主義の拡大は、「神の国」の拡大を意味することになる。海老名は『世界と共に覚めよ』所収の「民主主義の勝利と平和」において、大戦における連合国の勝利を確信しつつ（また、ロシア革命とドイツ革命が民主主義を確立するものと誤認しつつ）、「民主主義は欧州列国共通の大精神である。この精神が欧州の統治権を有するに至らば列国民は協力の必要こそあれ、戦争の必要はなくなるのである」（同 p.111）と述べ、さらに続けて「民主主義が盛んになる時は世界は平和を謳歌するに至る」（同）と述べている。

この議論を、「神の国」の建設のために「悪戦苦闘」を要求し、非戦主義批判を展開していた日露戦後期と比較するならば、きわめて大胆な転回であると言えよう。民主主義世界においては「戦争の必要はなくなる」という断定は、内村鑑三の有名な「非戦論の原理」における「戦争は廃まります、必ず廃まります」¹⁰⁾というフレーズを想起させる。しかし、内村が平和の不可避を論拠に非戦論を主張し始めた日露戦争期、海老名は戦争の不

可避を論じて非戦論批判を展開し、海老名が民主主義による平和の到来を展望するにいたった第一次大戦末期以降には、こんどは内村が民主主義を見限って再臨運動に没頭していったのである¹¹⁾。

しかし、海老名がこのような平和への展望をもつにいたったとしても、戦争を否定する論理がそこから導かれたわけではない。戦争が「不要」であるという論理は、戦争をなすべきではないという論理と同じではないからである。また、民主主義によって平和がもたらされるという論理は、民主主義を勝利させるための戦争を無条件に肯定する論理にもなりうる。さらには、民主主義が戦争を不要なものにするという認識自体にも、明確な根拠が与えられていない。このように考えるとき、海老名の第一次大戦末期における平和論は、戦争によらない平和の達成を展望するものであったとはいえ、それを裏付ける論理には乏しかったと言わざるをえないであろう。

結語

以上、日露戦後期から第一次大戦期にかけての海老名の平和論を「神の国」論に照らしながら検討してきた。まず日露戦後期において、海老名は平和の実現を地上における「神の国」の実現として理解し、その実現手段としての戦争を積極的に正当化し、非戦主義を批判していた。つぎに第一次大戦期においては、「神の国」における国民の自主独立性に逆行する官僚主義と軍国主義を批判しつつ、それらを打破するための戦争についてはこれを肯定していた。さらに、大戦末期においては、大戦後における万国聯立主義と民主主義による平和の到来を展望していたが、それを具体的に裏付ける根拠はかならずしも十分に提示されていなかった。

このように見てくるとき、海老名の平和論は、「神の国」論として「父子一体」の平和のユートピアを提示するものではあったが、そこにいたる道筋、すなわち平和を実現するための道筋についての明快な解答を与えるものではなかったと結論づけられよう。海老名の「万国聯立」論と民主主義論がきわめて不徹底に終わっていることも、このような「神の国」のユートピア的性格に由来している。海老名の「万国聯立」と民主主義は、多様で複雑な世界におけるデリケートな秩序原理としてよりも、多様性をそぎ落とされ、「神の子」としての「共通の徳性」によって一元的に成立する秩序として描かれているからである。

また、このような平和実現の論理の欠如は、海老名の神学もしくは自由主義神学の限界を指し示していると考えられる。海老名の神学においては、イエスがその「霊能」によって養子論的に「神の子」とされたのと同様に、人間も「霊的覚醒」によって「神の子」となることが求められる。「神の子」になることは、神に盲従することではなく、イエスと同様に独立の人格をもちながら神の意志を実現する存在になることであった。したがって、「神の国」すなわち平和のユートピアへの接近は、もっぱらこのような霊的覚醒によ

る国民の道徳的完成にゆだねられたのである。このような論理を採用するとき、道徳性の具体的内容、さらには神の意志までもが、人間の決定事項とならざるをえない。海老名の平和論が日露戦争期には非戦論批判として展開されたのは、神の意志の名のもとに戦争を正当化しえたからであった。また、海老名の平和論が第一次大戦期には民主主義論として構想されながら不発に終わった理由も、民主主義こそ世界的趨勢すなわち神の意志であるという霊的直観に依拠したためであり、それゆえ民主主義それ自体の神学的考察を欠いていたからであった¹²⁾。

注

- 1) 海老名の弟子として朝鮮伝道に従事し、海老名の伝記著者でもある渡瀬常吉は、「日本的キリスト教」の典型ともいえる『日本神学の提唱』(1934・昭和9年)を著している。
- 2) 海老名の戦争論にかんしては、武邦保「海老名弾正の戦争論」(『キリスト教社会問題研究』第23号、1975年)が詳しい。
- 3) 吉馴明子『海老名弾正の政治思想』(東京大学出版会、1982年)。
- 4) 芦名定道「キリスト教思想研究から見た海老名弾正」pp.6-7、『アジア・キリスト教・多元性』第2号(現代キリスト教思想研究会、2004年3月)。
- 5) 日露戦争期の海老名の戦争論については、金文吉『近代日本キリスト教と朝鮮——海老名弾正の思想と行動』、とりわけ第四章を参照。金は、海老名の「神道のキリスト教」の中に、侵略戦争と植民地支配の肯定論を看取している。それにたいして本稿は、自由主義的キリスト教の倫理的な「神の国」論に同じものを見る試みである。
- 6) 『世界と共に覚めよ』においては、第一次大戦が武力という物理的な力よりも、「霊能」による武力のコントロール力こそが決め手になるとされ、この力が民主主義と官僚主義の間で争われているという見方が示されている。
「近世文明の特徴は霊能と物力との恐るべき健闘である。孰れが優勝旗を得べきかの猛烈なる奮戦である。欧州の大戦乱はこの二大力の決戦的奮戦である。……今回の戦争は物力と霊能とが最もよく調和し、発達して居る方が勝つというのである。故にこの戦争は霊肉二つながらの争奪戦と観ねばならぬ。……この大戦は単に巨砲と毒瓦斯と飛行機と潜航艇との優勝劣敗ではない。是等は霊能の発明として重要視すべきものに相違なきも、活眼を注ぐ所は更に深奥ならざるべからず。政治的方面から観れば民主主義と官僚主義との戦争といってもよい。又は個人主義と非個人主義との戦争といってもよい。」(『世界と共に覚めよ』p.71-73)
- 7) 「真の平和はその根拠を心霊の奥深き所に有するが故に、容易く形式的に社会の表面に顕わるべきものにあらず、必ずや霊と肉との調和より来るべきなり。しかして霊と肉との調和は智情意の最も円満なる発育に待たざるべからず。智情意の円満なる発育は、則ち幾多の奮闘錬磨を実験するより来る。吾々一個人の胸中に多くの苦闘を有する限りは、万国の平和は断じて望むべからず。人類の現情を観るに、国家そのものの中に苦闘あり、家庭そのものの中に紛擾あり、個人そのものの中に悪戦あり。万国平和の如きは前途猶遼遠、僅に干戈砲銃を去り、常備の軍隊を解散すれば、必ず来ると思惟するは、即ち痴人の夢にあらずして何ぞや。……平和は平和の結果にあらず、平和は悪戦苦闘の結果なり。悪戦苦闘を

厭うて平和を求むるは、勤勉力行を厭うて衣食を求むると一般にして、即ち求むべからざるものを求むるものなり。」(『新国民の修養』 p.291-292)

- 8) 自衛のための戦争をより積極的な戦争と区別することは論理的には可能かもしれない。しかし海老名の戦争肯定論からは、自衛権への限定はおろか、このような区別そのものを導き出すことは困難であろう。むしろ、神の国の実現のためには、積極的に「悪戦苦闘」を引き受けていくことが要請されることになる。したがって、日露戦後期の海老名の戦争肯定論は、自衛のための戦争や必要悪としての戦争のみを肯定する消極的なものではなく、「神の国」の建設を戦争によってこそ達成しようとする、きわめて積極的な性格をもっていたといえよう。
- 9) 海老名自身の言葉を正確に写せば、「一大勢力が諸国を征服するより起り来る所の平和」である。(『世界と共に覚めよ』 p.91)
- 10) 内村鑑三「非戦論の原理」(1908年・明治41年8月10日)。
- 11) 内村は1919年(大正8年)5月11日の「聯盟と暗黒」において、「平和は来る、然れども人に由ては来らない、神の定め給いし平和の君に由て来る、彼が再び世に臨り給う時に来る」といい、「其の人の政治たるの点に於ては米国の民本主義も独逸の帝国主義も何の異なる所はない」として、民主主義が平和をもたらさないと断じた。
- 12) 海老名が晩年に「新日本精神は、之を推し広ぐれば、世界精神である」と述べ、日本固有の信仰的伝統の発展形の中に「神の国」を展望し、天皇制をそこに組み込むことができたのも、同じ事情によるものと言えよう。「新日本精神の真髓」、日本組合基督教会『昭和十年 組合教会講演集』(1936年・昭和11年)、p.88。